

第45号

発行日：平成20年6月18日
発行者：医学研究科広報委員会
印刷：やまと印刷株式会社

弘前大学大学院医学研究科・医学部医学科広報紙

医学部ウォーカー

- 1面：医学研究科長医学部長寄稿
 - 2面：新しい放射線治療装置の導入
 - 3面：19年度卒業生進路状況
 - 4面：青森県知事講演会
 - 5面：SD章授与式・チュートリアル・ベストシナリオ賞
 - 6面：研究室研修の実施と優秀発表賞について
 - 7面：英国での臨床実習のための短期留学体験記
 - 8面：人事異動
- 題字 弘前大学長 遠藤正彦氏筆

医学研究科長 寄稿

勉学の勧め

弘前大学大学院医学研究科長・医学部長 佐藤 敬



福沢諭吉の『学問のすゝめ』は明治初期に初版が出版されて以来およそ三百万部も読まれたそうです。現在の基準からは驚異的なベストセラーだったことになるのでしよう。私の理解では、福沢諭吉が言いたかったことの少なくとも一つは、「本質的に差異のないはずの人間を分けるのは学問である」ということかと思えます。畏れ多いことに、『学問のすゝめ』には、現在になってみると前近代のなおいを感ずる部分が多量にあるにしても、また、実学を優先している傾向がみえるにしても、その基本は時代を超えて真実であり続けるでしょう。

この春も、多くの優秀な新入生諸君が勉学の意欲に燃え、立派な医師になることを決意して弘前大学医学部の一員となりました。その意欲と若い力を頼もしく思うと同時に、それを是非持ち続けて欲しいと願っています。

医学部に入学して時日も過ぎると、医師となる目標

は六年先にあり、当面の勉強には医学との関係が明確に感じられない場合もあるかもしれません。本当は大いにあるのですが、大学一年生の過ごし方が、その後の勉学に大きく影響する場面もあるのではないかと推測しています。しかし、医学を学ぶ過程で何が必要で何が不要かは誰にも分かりません。以前にも書いた通り、およそ医学に（多分すべての領域において）無関係で不要な学問などないのではないかと、私には思えます。ましてや、学問をすることの意義など明確にできるものはありません。敢えて言うなら、「私たちは学ばなければならぬ」という言葉さえ、既に純粋さを失ってはいないでしようか？ 私たちには、人として無条件で受け入れるべき大前提があり、それな文学、科学、芸術、スポーツ等々に関する根源的価値観は成り立たないのです。

少し大きくなりましたが、新入生諸君のみならず、医学部学生の方すべてに、医学部学生の方すべてに、強い意識を改めて求めたいと思えます。学内外の試験勉強にのみ捉われず、自ら率先して学ぶことが必要です。医学に限らず、あらゆる学問は常に進歩し続けて

社会の実現に貢献できるのです。諸君には、その期待に応えるべき、半ば義務ともいえるべきものがあります。そして、諸君には、それを達成する能力があることと、社会からの大きな期待があることを忘れず、自らを律し、そして努力して欲しいと願っています。

最後にもう一つ新入生諸君への具体的お願いがあります。是非、大学内での省エネに努めて下さい。ことあるごとにお願している「電気はつけたら消す」の原則を一人一人が実践して下さることは、地球環境への配慮であると同時に、諸君の学業環境整備にもつながることです。

地域医療を考える シンポジウムを終えて

社会医学講座 教授 中路重之

十二月一日、リニューアルのための一時閉館が迫るシティ弘前ホテル青海の間にて、「地域医療を考えるシンポジウム」が弘前大学大学院医学研究科・医学部主催、弘前大学医師会共催で開催されました。



シンポジウム 弘前大学医学部附属病院長 花田勝美氏
シンポジウム 津軽地域の救急医療を考える 市民フォーラム事務局長 濑谷亨氏
シンポジウム 岩手県五市市長 熊坂義裕氏

その目的は、関係者に事前配布した文章をお読みいただければ明らかです。「ご承知のように青森県は今、多くの医療の問題を抱えています。医師不足、とくに産科、脳外科、小児科医の不足、自治体病院の縮小・閉鎖、などです。弘前大学医学部はこれまで種々の改革を行ってきました。医局制度の廃止、教員任期制の導入、なかでも卒業後教育の改革には多大の労力を費やしてきました。しかし、新臨床研修制度導入による医学部卒業生の大学離れが発端となり、医学部においても医師不足が顕在化してまいりました。このような背景で、市民の皆さんに、医学部、附属病院の現状と姿勢をご理解いただき、ご意見ご批判をいただきたく本講演会が企画されました。医学研究科長の発案であるこのシンポジウムはそのような前向きな意図を持って行なわれたのです。

シンポジウムは、弘前大学医学部を昭和五十三年に卒業された熊坂義裕宮古市長（岩手県）で、タイトルは「卒業生・行政の立場からみた弘前大学の貢献」でした。市長は医療のスペシャリストとして全国市長会の大任を担っており、厚生労働省社会保障審議会医療部会の主要委員の一人として活躍中です。弘前大学卒業後宮古市長になられるまでの経緯、国の医療行政の現状とあり方、などについて分かりやすくお話しになりました。なかでも「今の医療崩壊を招いたのは国の政策の過ちである」、「弘前大学医学部附属病院はもう十分にやれることはやっていく」などのメッセージからは、母校への強い愛情が感じられました。

次のシンポジウムは、「津軽地域の救急医療を考える市民フォーラム」事務局長の濑谷亨さんで、タイトルは「市民の立場からみた弘前大学の貢献」でした。濑谷さんは、弘前大学に高度救命救急センターを設立することへの嘆願署名約四万人を集めた中心人物の一人です。濑谷さんのお話で印象に残ったのは、市民アンケートの結果で、弘前大学は、りんご、桜に並ぶ当地の「名物」であり、もっと本来的な役割を果たしてほしいという応援団としての「エール」でした。

最後のシンポジウムは、弘前大学医学部附属病院長の花田勝美先生で、タイトルは「弘前大学医学部の役割」でした。弘前大学医学部・附属病院の現状について、わかりやすい数字で説明していただきました。シンポジウムの発表後、約一時間の討論時間が持た

れ、フロアから多くの質問、意見が出されました。このように会は盛会裏に終わったのですが、いくつかの反省点もありました。その第一は何と云っても参加者の少なさです。趣旨が医学部、附属病院の正しい情報、姿勢を市民の皆さんに発信しようということであったのに、一般市民の皆さんの参加が二十名程度にとどまったのは残念でした。この理由はこの種の話題への市民の皆さんの関心の低さにもありますが、何と云っても我々主催者の宣伝不足であったとのご意見もいただきました。

新しい放射線診療装置の導入

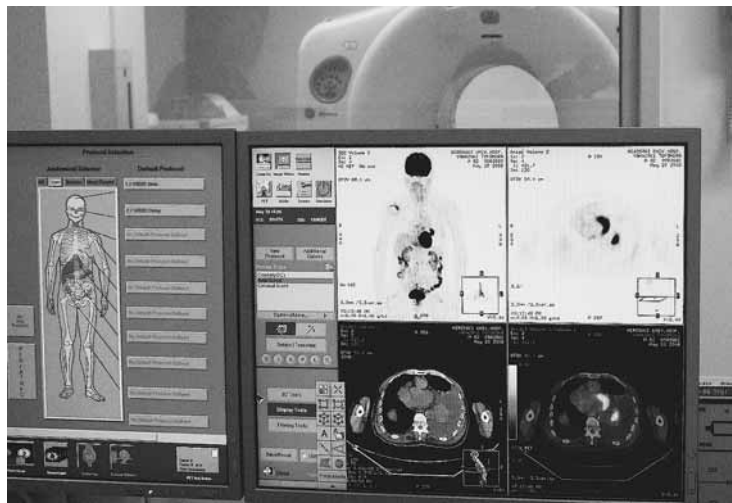
放射線科・放射線部 阿部 由直

(石灰化)組織とが区別されず、冠動脈疾患だけではなく、あらゆる部位での新たな病変の描出の可能性を秘めた装置です。また、四月一日から64列CTの冠動脈検査において六百点の加算が認められたので、報酬上の便益も図られると考えます。

PET-CTは、六月から本格稼働します。従来はポジトロン核種を生成するサイクロトロンと薬剤である[¹⁸F]FDG(フルオロデオキシグルコース)の合成が必要でした。岩手県水沢市にフルオロデオキシグルコースの製造工場ができたのでサイクロトロンなしの稼働が可能となりました。PET-CTで大切なことは、特定機能病院である大学病院として必要な機能を備えること、がん診療連携拠点病院として年間約千四百名のがん患者さん(中路教授、私信)が来院する大学病院としてのニーズに応えられることです。また当院

のPET-CTの特徴は、癌の病期診断のみならず放射線治療と直結していることです。国内でもあまり例がありません。つまり放射線治療ではPETのデータを直接治療計画装置に読み取ることで、PETの位置データをシミュレーションに反

新しい放射線診療装置が附属病院に導入されました。64列デュアルソースCT(64列CT)、PET-CT、CT付き血管撮影装置、SPECT-CTです。64列CTでは、高速で多層CTが撮影できますので、冠動脈撮影が可能です。その性能は予想以上に優れており、処理時間も非常に短いので、診療面での有益性が向上すると期待されます。デュアルソースというのは二管球を備えることによる高速性と二管球のそれぞれのエネルギーを特性値に設定することで結果としてヨード濃染部位と骨



映できます。さらにPETの呼吸同期装置と治療用の呼吸同期装置と連動させることで、より正確な治療が可能となります。このことにより放射線治療を含めたがん診療に多大な貢献が期待できます。新しい血管撮影装置は、フラットパネルを検出器とした高性能の装置で、回転することでCT像が作成できます。またSPECT-CTもX線による吸収補正を行うことができるので、より正確な再構成像が得られます。放射線部はこれらの装置の運用業務を担当し、放射線科はこれらの装置から得られる情報を診療に還元することに貢献しています。また診療だけでなく教育と研究に多大な貢献をするものと考えております。最後に導入しましたが、これらの装置を導入するにあたり貢献いただいた関係各位に心よりお礼申し上げます。

青森県立保健大学

教授に就任して

公立大学法人 青森県立保健大学
健康科学部栄養学科 教授 今 淳



平成二十年四月一日、青森県立保健大学では栄養学科が開設されました。これまで、皮膚の老化や抗加齢(アンチエイジング)に関する研究を行っており、今後は食・環境との関わりを大きく展開させる目的から、教授として着任致しました。医学部出身の者に対してこの様なポジションは全国的に数少なく、私自身非常に希望しておりましたので、この着任は幸運であり、選出して下さった本学のスタッフに感謝している次第です。そしてこの度、広報委員会から本原稿の依頼がありました。通常、この様な依頼はなかなか頂けないものではございません。従いまして心から感謝を申し上げます。次第です。

私は北海道函館市の出身です。数学者になるのが将来の夢でしたが、たまたま本屋で手にした法医学の本がきっかけで医学部受験を決意し、弘前大学医学部に入学しました。河西達夫教授(解剖学第二講座)や遠

藤正彦教授(生化学第一講座、現学長)の名講義を受けて基礎医学に興味を持つ様になりました。皮膚科医の道に進みましたが、常に研究をする臨床医であろうと肝に銘じて生きてきました。その結果、多くのすばらしい研究指導者と出会えることができました。生化学第一講座の遠藤正彦学長、故・高垣啓一教授、皮膚科学講座の橋本功名教授、花田勝美病院長、澤村大輔教授の厳しく且つ暖かい御指導によって、皮膚細胞外マトリックスのV型コラーゲン、プロテオグリカン、ヒアルロン酸などの分子生物学的研究や糖鎖生物学的研究を行い、老化やアンチエイジングに関する成果を上げることができました。また、このことがきっかけで、米国ジェファソン医科大学(Jouni Uitto教授)にも留学でき、世界最先端の皮膚科学研究のメンバーとして研究する経験も積みま

した。今から五年前、大きな転機が訪れました。遠藤正彦教授の後任として教授に就任されたばかりの高垣啓一教授から、今後は生化学第一講座にも分子生物学的な研究を立ち上げたいこと、また臨床医学に繋がる研究も展開させたいことなどが

ら、教室のスタッフの一人としてどうかとのお誘いを頂きました。身に余る光栄なことでありましたが、長年皮膚科医を続けていたため、非常に迷いました。しかし、研究展開の最大のチャンスと考え、助教授として着任することを決意しました。先生の御指導の下、これまでの研究を継続し、特にプロテオグリカンやヒアルロン酸の老化やアンチエイジングに重点を置くことにしました。凝り性な私はアンチエイジングにどっぷりと漬かり始め、これまで医学の世界ではあまり注目されなかった栄養学や食品学の重要性に気付きました。これらの学問も研究に大きく取り入れて行きたいと考えようになりました。このことがきっかけで本学に着任することになった次第です。この途中で高垣啓一教授が病に倒れられ、お亡くなりになってしまいました。全く予想しなかったこの結末に、私達教室員一同は茫然自失になりました。しかし、先生の常に厳しく優しく励ましてくれた御指導のお姿を思い起こし、皆自らを奮い立たせて研究を再び軌道に乗せたことが思い出されます。近年の急速な高齢化、少子

化によって、保健医療・福祉に対するニーズは増大し、誰もが心身ともに健康な状態で安心して暮らせる社会を築くことが強く望まれています。それには、保健医療・福祉従事者の充実と確保が必要であり、このため、青森県では、豊かな人間性と能力を培い、幅広い領域で人々の健康及び福祉の向上に貢献できる優秀な人材を育てることを目的として本学を設立いたしました。現在、人間総合科学科目、看護学科、理学療法学科、社会福祉学科、そして私の着任した栄養学科からなり、教員数、教育方法とも非常に充実しております。特に文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)」に採択されていることは特筆すべき点です。大学院修士課程及び博士課程も設置されており、さらに高いレベルの教育・研究を目指す学生が多数おります。しかも、健康科学教育センター及び健康科学研究センターがあり、ここでは基礎研究及び社会・地域貢献の実用研究が積極的に行われております。生化学第一講座出身の先生、青森県の各種研究機関、栄養や環境などの国の研究機関から着任した先生が多数おり、食と健康、環境と健康といった最先端の研究を推進され、しかも高額の研究費をみな獲得されておりです。設備・施設に關しましても非常に充実し、研究費に關しましては弘前大学と同様に学内の裁量経費等の競争的研究費が幾つもあり、私の様な者にとりましては十分過ぎるほどの研究環境です。これには青森県民並びに青森県政の力による所が非常に大き

く、築きあげて下さったすばらしい環境に感謝し、一生懸命頑張る参りたいと考えております。栄養学科に關しましては、青森県初の管理栄養士養成施設であり、また栄養教諭養成施設でもあります。国公立(法人を含む)では本学を除き、北は市立名寄大学から南はお茶の水大学まで管理栄養士養成大学の空白地帯となっており、私立大学を含めた場合でも青森県、秋田県、岩手県、山形県では未だ管理栄養士養成施設がゼロの状況です。従って、本学の責任は非常に重大であり、教育は当然のこと、健康日本21に代表されるような、食品学、栄養学、家政学及び医学を総合基盤にした予防を重視した研究や社会貢献に十分に込めたいと思っております。特に私の場合は皮膚科学を専門とすることから、これまでの分子生物学及び糖鎖生物学の手法を取り入れた研究を更に発展させ、「皮膚と食」、「皮膚と栄養」、「皮膚と環境」といった領域に關する研究も進め、分子栄養皮膚科学という新しい分野を開拓できればと考えております。最後になりますが、今回、本学に着任できましたのは、これまで出会ったすばらしい研究指導者の先生、鶴桜会並びにその関係各位の皆様の御支援があったからです。その御恩に少しでも報いるべく尽力したいと思っておりますので、今後とも更なる御指導・御支援のほど宜しくお願い申し上げます。

平成十九年度 卒業生進路状況

副学務委員長 鬼島 宏
(病理生命科学講座教授)

H18~H19 卒業生進路状況

	平成18年度卒業生進路		平成19年度卒業生進路	
	人数	%	人数	%
青森県	27	25.7%	35	34.3%
北海道	9	8.6%	8	7.8%
東北(青森県以外)	14	13.3%	13	12.7%
関東	20	19.0%	11	10.8%
東京	9	8.6%	6	5.9%
中部	12	11.4%	11	10.8%
近畿以西	8	7.6%	10	9.8%
不合格・その他	6	5.7%	8	7.8%
合計	105	100.0%	102	100.0%

国家試験合格者 99 95.2% 101 99.0%

まず特筆すべきことは、今回の第百二回医師国家試験の結果である。弘前大学の国家試験合格者が、新卒九十九・〇％(二〇一/一〇二)、全体九十六・二％(一〇二/一〇六)と過去最高レベルの結果であった。全国平均の新卒合格率九十四・四％(七、二〇一/七、五一九)、全体の合格率九十一・六％(七、七三三/八、五三五)と比べても高い水準にあり、卒業生の頑張りが実を結んだ形となった。

卒業生の地域別研修先(付表参照)は、青森県内が三十五名(三十四・三％)であった。一昨年二十四名、昨年二十七名と徐々に増加傾向にあり、地域医療と連携するカリキュラム導入も加わり、弘前大学医療圏における自らの役割を自覚する卒業生が増えているといえよう。一方、北海道・東北(青

平成十九年度 学位記伝達式挙行される

学務委員長 奥村 謙
(循環呼吸器内科学教授)

平成二十年三月二十一日午前十一時から、医学部コミュニケーションセンター大ホールにおいて、平成十九年度学位記(医学士)伝達式が、遠藤正彦学長、石戸谷一鶴校会理事長ご列席のもとで行われた。平成十九年度医学部医学科卒業生総数は百二名であり、この中には三年次学士編入学も含まれていた。今年度の卒業生は、九十九・〇％と過去最高であろう国家試験合格率(新卒)を記録しており、学位記伝達式では六年間(ないしは学士編入四年間)の勉学の苦勞を乗り越えた爽やかな達成感を一杯で表現していた。

佐藤敬医学部長から卒業生一人一人に対して学位記の伝達が粛々と行われる中、会場を埋め尽くした卒業生諸君に加えて、ご来賓の方々や教員も新たな門出の喜びを卒業生達と共有し



弘前大学医学部医学科 第54回卒業記念謝恩会

弘前大学医学部医学科第54回卒業記念謝恩会 平成20年3月21日 於ホテルニューキャッスル

学位記伝達式と同日の三部医学科第五十四回卒業記念謝恩会が開催された。昼間の卒業式・学位記伝達式キヤッスルにおいて、医学部医学科第五十四回卒業記念謝恩会が催された。昼間の卒業式・学位記伝達式キヤッスルにおいて、医学部

第54回 卒業記念謝恩会開催される

学務委員長 奥村 謙
(循環呼吸器内科学教授)



入試専門委員会報告 平成二十年度医学科入試総括

医学科入試専門委員長 中根 明夫
(感染生体防御学講座教授)

昨年六月の学士編入学第一次選抜試験に始まった平成二十年度入試が無事に終了し、四月八日の入学式で新入生を迎えることができました。それぞれの選抜試験にお忙しい中試験監督や面接委員、出題委員、採点委員をしていただいた先生方および学務担当をはじめとした事務職員の方々に改めてお礼を申し上げます。

平成二十年度入試全体を振り返ってみますと、少子化の影響もあり全国の国立大学各学部で志願者が減少した中、本学医学科においては前期日程の志願者倍率が八・三四倍と、三年ぶりに高倍率となりました(表1)。推薦入学では、定員三十名のうち青森県枠二十名でしたが、臨時定員増十名分を経過措置として青森県内枠に加え、全国枠十名を含める四十名を募集しました。県内からは昨年より十六名増加し、七十二名が志願しました。一方全国枠は六十六名と、昨年より

漫才やスライドによる教授模写講義などでは最高潮に達していた。臨床実習の時のおとなしさはいったい何であったのだろうかと思わせるほど芸達者な卒業生諸君の姿がそこにはあった。別れを惜しむことよりも未来に羽ばたく喜びに満ちた祝宴は、華やいだ雰囲気のままいつの間にかお開きとなった。

り志願者が倍増しました。結果としては三十二名の青森県内勢が合格し、意気をあげました。

入学者の出身地域をみますと(表2)、特筆すべきは青森県出身者の著増です。青森県内枠に臨時定員十名を加えたこともあり、十九年度二十二名から三十九名となりました。これに三年次学士編入者を加えますと四十二名となり、将来の明かりが見えてきました。青森県出身入学者のうち三十二名が推薦入学者ですが、前期日程の入学者も昨年度の二名から七名へと急増したのも注目に値します。青森県に次ぐのは、岩手県七名、北海道五名、茨城県、千葉県、神奈川県各四名と続きます。

出身高等学校では、弘前高等学校十二名、青森高等学校十名、八戸高等学校九名、五所川原高等学校七名とに続き、県内勢の健闘が目立ちました。一方、高等学校卒業後の期間に関しては、現役が増えた一方、卒業後三年以上経過した入学者が増加しました(表3)。また、女子が二十二名、学士編入学を入れると三十名となり、昨年よりは女子の比率が減少しました。

平成二十年度入学者志願者総数は三年次編入学試験も含めると千七百七十二名で、昨年より二百十二名増加しました。大学全入時代の際に到来する各大学・学部とも氷河

(次ページへ続く)

表 1. 志願者倍率 (カッコ内は受験者倍率)

年度	推薦入学	前期日程	後期日程	計
16	2.60(2.45)	4.19 (3.48)	7.90 (2.70)	4.20 (3.13)
17	3.90 (3.75)	10.92 (9.76)	17.60 (10.20)	10.00 (8.31)
18	4.00 (4.00)	6.16 (5.44)	12.00 (6.60)	5.85 (5.06)
19	3.03 (3.03)	5.44 (4.56)	—	4.54 (3.99)
20	3.45 (3.45)	8.34 (7.18)	—	6.17 (5.52)

募集人員：平成 17 年度まで推薦入学は 20、前期日程は 50、後期日程は 10。平成 18 年度は推薦入学 25 (うち青森県枠 15)、前期日程 50、後期日程 5。平成 19 年度は推薦入学 30 (うち青森県枠 20)、前期日程 50、後期日程は廃止となった。
平成 20 年度は臨時定員増 10 名を推薦入学青森県内枠として募集したため推薦入学 40 (うち青森県内枠 30) となった。

表 2. 地域別入学者数

年度	青森県	東北 5 県	北海道	その他	計
16	23 (17/6)	21 (18/3)	7 (6/1)	29 (20/9)	80 (61/19)
17	26 (17/9)	2(1/1)	6 (4/2)	46 (37/9)	80 (59/21)
18	24 (15/9)	12 (9/3)	7 (4/3)	37 (26/11)	80 (54/26)
19	22 (11/11)	14 (10/4)	6 (5/1)	38 (25/13)	80 (51/29)
20	39(27/12)	13(9/4)	5(4/1)	33(28/5)	90(68/22)

カッコ内は男女比

表 3. 高校卒業後の期間別入学者数

年度	現役	1 年	2 年	3 年以上	その他
16	34 (24/10)	20 (17/3)	11 (8/3)	15 (12/3)	0
17	33 (19/14)	13 (11/2)	12 (11/1)	22 (18/4)	0
18	33 (23/10)	20 (10/10)	13 (8/5)	14 (13/1)	0
19	37 (20/17)	20 (13/7)	12 (8/4)	11 (10/1)	0
20	50 (33/17)	16 (14/2)	5 (4/1)	18 (16/2)	1 (1/0)

カッコ内は男女比

表 4. 平成 21 年度入試選抜試験日程

20 年 6 月 22 日 (日)	三年次学士編入学第一次選抜 (学力試験)
20 年 8 月 24 日 (日)	三年次学士編入学第二次選抜 (学力試験と集団面接)
20 年 9 月 20 日 (土) 9 月 21 日 (日)	三年次学士編入学第三次選抜 (個人面接)
20 年 11 月 8 日 (土) 11 月 9 日 (日)	AO 入学第一次選抜 (模擬講義試験、ケーススタディによる評価、集団面接)
20 年 12 月 20 日 (土) 12 月 21 日 (日)	AO 入学第二次選抜 (個人面接、ワークショップによる評価)
21 年 1 月 17 日 (土) 1 月 18 日 (日)	大学入試センター試験
21 年 2 月 25 日 (水) 2 月 26 日 (木)	前期日程選抜 (学力試験) 前期日程選抜 (集団面接)

(前ページより)
ことを祈っています。
一月には、大学入試センター試験を医学科と保健学科が担当し、多くの先生方や事務方に手伝っていただき、厚くお礼申し上げます。もうすぐ平成二十一年度の三年次学士編入学試験が始まります。最後に

平成二十一年度の入学選抜試験の予定を表 4 としてお知らせいたします。年を追う毎に教員あたりの仕事量が増加していますが、入試業務は弘前大学の教員として根幹をなす仕事ですので、今年度も先生方のご協力を重ねてお願い申し上げます。

平成 20 年度新入生ガイダンス 三村申吾青森県知事講演会

学務委員長 奥村 謙 (循環呼吸臓内科学講座教授)

平成二十年四月九日、新入生ガイダンスに先立ち、午前九時から三村申吾青森県知事による講演会が M C C で開催された。三村知事の新生入生を対象とした講演会は平成十七年から四年間連続して行われているが、青森県の期待の大きさがうかがわれた。講演中、知事は「パワーポイントを示しながら「健やかで安心して暮らせる社会を目指して」というタイトルで、約一時間にわたって熱弁をふるわれた。

最初に青森県が取り組んでいる十のプロジェクトを紹介し、その中で「健康といのちの育み推進プロジェクト」を重点的に進めていることを強調された。このプロジェクトの中心は保健・医療・福祉の包括ケアシステムの確立であり、その根本をなす医療サービスの充実には何よりも医師の確保が前提となっていること、とくに青森県では若い力を必要としていることを新入生にアピールされた。医師確保のための方策として、医療環境整備の重要性を強調され、卒前卒後教育指導プランを

提示された。また、女性医師の待遇改善や医師の過重労働の解消、病診連携による医療効率化についても青森県の特長性を示しながら説明された。

新入生の多くは高校を卒業したばかりで、これから医学・医療を学ぶわけであり、知事の意図するところ、とくに地方の医師不足問題をどの程度理解できたかは分からない。病診連携や卒後研修、青森県の現状等、現時点では理解することは困難だっただろう。しかしながら、青森県の医学生に対する期待がいかに大きいかについては十分理解することができたと思われる。また、医学部に進学したことの意味、社会に対する責任についてもある程度は認識できたのではなかろうか。

講演後の質疑で、新入生、とくに学士編入生から青森での暮らしや将来地域で医師として活動が続けるにあたって県がどのようにサポートしていくのか等の質問があり、知事も出来る限りのサポートを約束する旨の回答をなされた。新入生は



将来医師として活躍する自らの姿を思い描きながら医学を学び、青森の地で青春時代を送ることとなる。三村知事が繰り返し訴えられた地域(地方)の現状(苦悩)を理解し、自分ができるか、一人一人真剣に考えて欲しいと思う。

知事の講演会に引き続き新入生ガイダンスが行われた。佐藤医学部長の挨拶についてで学務委員長が紹介され、学務委員長の奥村が医学科六年間の教育の流れについて説明した。「教えてもらう」から「自ら学ぶ」姿勢へと切り替えなければならぬこと、習得すべき内容が非常に多く一夜だけの学習ではついていけないこと、予習は無理でも復習や講義内容の確認を毎日行うこと、な

どを言葉優しく、内容は厳しく強調した。一般的事項として、飲酒や事故等についても注意した。また、できるだけ部活に所属し、人間関係構築の学習の場としても役立てて欲しい等、アドバイスした。最後に今年の弘前大学医学部卒業生の医師国家試験合格者率(九十九%)が全国の大学医学部の中で第一位であったことを紹介し、先輩に続いて良き伝統を築いて欲しいとの期待を伝えた。医学を学ぶことは確かに困難かもしれないが、医学部医学科に入学した学生はそれを超すほどの能力も備えているはずである。弘前の地で青春を謳歌し、充実した学生生活を送って欲しいと思

平成二十年度

新入生歓迎会

皮膚科学講座 教授 澤村 大輔

平成二十年度新入生歓迎パーティーが医学部医学科学友会・鵬桜会主催により医学部コミュニケーションセンターにて四月九日に開催されました。節目の年である、平成二十年度は、新入生九十名(男子六十八名、女子二十二名)であり、学友会四十名、鵬桜会八名、教員二十一名が歓迎しました。第一部では、鵬桜会石戸谷理事長の弘前大学医学部の歴史と母校愛あふれるお話を導入として、遠藤学長

大学を目指し学生を鼓舞するお話が聞かれた。また、佐藤医学部長は医学者となつて医学の進歩に貢献するように、さらに出席の教授陣全員からの挨拶には、今後の厳しさを求める内容から、またユーモアあふれる話題、さらにクラブの勧誘まで、いろいろ占められました。第二部のパーティーでは、立食で食事をとりながら新入生との歓談、またその後のサークル所属の学部学生の勧誘とあわただしくもなごやかなひとときでありました。



コラム

医学部 こぼれ話...

大学院医学研究科・基礎研究棟の改修が完了、当講座でも最終的な引越しの始まり。現在の試験のきりがいいところ、また学会発表のために必要な実験終了後、移動予定。機器類の移動、再設定、立ち上げ、再調整と、時間的な損失は不可避。できるだけ中断時間を短く、引越しの費用も、少なく、一部の機器類は、専門業者(一般の引越し業者でなく)に、移動および設置を依頼する必要あり。暑くなる前には、新しい基礎棟での実験を開始したいところ。など、講座スタッフを交え計画中です。四十五号発行のころは、新外来棟に次ぐ、二ユー基礎研究棟、発進となるはずでした。

私も実際に出席して、いろいろな人の話を聞き自分の入学の時を思い出しながら、楽しいこと悲しいこと、苦しいこと感動すること、いろいろなこの弘前の地で経験してください。若鮎のようになびちびちした学生諸君に接して、たくさんエネルギーをいただきました。

平成20年度 S D 章授与式

学務委員長 奥村 謙
(循環呼吸臓内科学講座教授)

平成二十年四月二日、医学部コミュニケーションセンター(MCC)において、五年次学生に対するSD章(Student Doctor章)授与式が行われた。加藤博之教授(総合診療部)の提案で平成十七年度より始められたSD章授与式は本年度で四回目を迎えたが、医学部医学科の春の行事として定着したものと思われる。新五年次学生全員が臨床実習そのまゝ白衣姿で臨み、心体ともに臨床実習に向かう真摯な気持ちで満ちているようであった。SD章は臨床実習生の身分証であるが、同時に医療人としての認識を新たにさせる標しでもある。式典という形式においてその目的をよく理解し、以下の誓いの言葉を胸に刻み、五年次BSL、六年次クリニカルクラークシップに臨んで欲しいと思う。授与式では佐藤敬医学

部長と学務委員長の挨拶、花田附属病院長の訓辞の後、五年次代表の太田理恵君に病院長よりSD章が授与された。続いて太田君が「弘前大学医学部臨床実習生の誓い」を宣誓した。宣誓内容を以下に記載する。

1. 私は、人類への奉仕に自分の人生を捧げることを誓います。
2. 私は、学び得た医学知識をもとに、良心と尊厳をもって医学の務めを果たします。
3. 私は、生命の始まりから人命を最大限に尊重し続けます。また、人間の性の法理に反して医学の知識を用いることはしません。
4. 私は、患者の健康を私の第一の関心事とします。
5. 私は、私への信頼のゆえに知り得た患者の秘密を、たとえその死後においても尊重します。
6. 私は、私を教え導く人々に尊敬と感謝の念を捧げます。
7. 私は、私の自由意志に基づき名誉にかけてこれらのことを厳粛に誓います。



授与式には医学部関係者以外に学生達がOSCEでお世話になった模擬患者(SP)の方や現在附属病院の研修医も参加され、SD章の授与を見守っていただいた。またマスコミの取材もあり、いい意味での緊張感が会場に満ちていた。SD章を授与された学生それぞれがBSLに臨む決意を新たにしていたが、以下に学生の感想を紹介したい。

『SD章を授与され、改めて実習に対する意識が強くなった。今まで以上に努力を惜しまず頑張りたい』(男子学生)
『学生であるとはいえ、診療の場に出るといことは社会に出ることと同じことだと意識して、学生だからと甘えることのないように自覚を持って臨みたい』(男子学生)
『春休みでだらけていた気持ちを引き締まった。これまでの学習スタイルとは全く異なるので、自分が弘大の学生として周囲に見られていることを忘れず、実習に臨もうと思った』(男子学生)
『これまで四年間一生懸命勉強してきたが、それでもいざ臨床の現場に出るとなると、とても不安を感じると、とても不安を感じると。指導くださる方々や患者さんに迷惑がからぬよう、最大限努力していきたい』(女子学生)
『SD章を授与されて、これから自分が医療者の一人として臨床の現場に出てゆ



くという実感がわいてきました。これまでの四年間学習したことを精一杯発揮できるように頑張りたいと思います。どんなときでも誠意ある態度で患者さんや教えてくださる先生方に向き合っていこうと思います』(女子学生)
『臨床実習はこれまでの学習とは大きく異なり、医療現場に踏み出す第一歩としてとても重要なものだと思

て感じた。楽しいこと、大変なこと、辛いことなどいろいろなことがあると思うが、その都度多くのことを吸収できたらいと思う』(女子学生)
『私たち学生もいよいよ臨床の場に出ることになります。本日、代表の方の宣誓を幾度も心の中で繰り返しながら、改めて責任を認識させられました。これより一層医学への研鑽を深めることとします。今度の授与式は身が引き締まる思いでした』(男子学生)
学生全員の感想に目を通したが、いずれも真剣で、一方で不安と期待が交錯する、そんな感想であった。感動と意欲、そして何よりも医療に対する真摯な心を大切にして、これから二年間の臨床実習を有意義に過ごされることを切に願う次第である。

チュートリアル・ベストシナリオ賞 贈呈式が行われる

チュートリアル教育実施委員会委員長 中根 明夫
(感染生体防御学講座教授)

チュートリアル教育は五年が経過し、昨年同様チュートリアル第二期生が十九年度後期でチュートリアルを修め、「屋根瓦教育」の実践の場になりました。今回は後期第一・第二クール、

述べ二十人の六年次学生が担当し、またティーチングアシスタントとして佐藤医学部長より辞令が渡され、学部長より辞令が渡され、学生チューリター制度がオンラインで導入されました。さらには後期には十八年度にトライアルが行われた英語の資料に基づいたチュートリアル授業が正式に導入されました。一方、昨年度同様、医学科図書委員会から図書費を頂戴し、チュートリアル教育を経験した学生有志とチュートリアル教育実施委員会のコア委員にお願いし、チュートリアルをはじめ医学教育に関する図書を選定してもらいました。二十年度には、加藤博之教授ご指導の下に行われた十九年度学生チューリターによるチュートリアル方式、いわゆる「ハワイ

優秀シナリオの表彰
第六クールおよび第七クールで学生が作成したシナリオとチューリターガイドをチュートリアル教育実施委員会のコアメンバーが評価を行い、二十八編を推薦しました。さらに第二段審査で優秀シナリオ三編を選びました。
青森医学振興会のご支援をいただき、三月四日医学部長室において、作者に図書券が贈呈されました。学生が作成したシナリオはさまざまな視点から作成されており、今年度も優秀なシナリオが多く出されました。

シナリオ優秀賞(五十音順)
鍵谷 卓司君
「弘前公園の近くに住んで

青森県医師会学術 奨励特別賞を受賞して

麻酔科学講座 准教授 石原 弘規

この度は、はからずも社団法人青森県医師会から弘前大学医師会設立二十周年を迎えるに際しまして学術奨励特別賞をいただきました。この賞は私のライフワークでありますブドウ糖を用いた体液量評価に関して昨年Springer社より上梓いたしました「Fluid Volume Monitoring with Glucose Dilution」に対して贈られたものです。少量のブドウ糖を静注し三分後の血糖値の上昇からブドウ糖の初期分布容量を算出し、この分布容量を重症患者の輸液管理の指標として用いる本法は私のオリジナルなアイデアです。本法の二十年以上に亘る研究成果をまとめたのが本書であります。今回欧米の査読者三名から評価を得て上梓できましたのも偏に麻酔科学教室の先代の松木明知名誉教授、現廣田和

美教授、また麻酔科学教室員の諸氏の絶大な支援があったからこそであり、心から感謝申し上げます。また最先端の脚光を浴びている研究とは異なり、このような地味な研究に對しまして評価して頂きました青森県医師会の佐々木義樓会長をはじめ医師会の諸先生にも深く御礼申し上げます。ありがとうございます。何よりも喜ばしいことは、本法が心臓の充満圧や心エコーなどを用いる体液量評価以上に、麻酔科学教室員の皆様の信頼を得て、附属病院ICUで重症患者の日常体液管理の指標として使用して頂いている点です。現在、フランス・ニース大学医学部麻酔科と協同研究を行っており、今後ともこの分野の研究を続けるつもりです。どうか宜しくお願いします。

でいる英子さん(三十二歳)には、近くの精肉店で働いている夫の孝之さん(三十五歳)と、久保 一利君
「Aさんはこの春から某大学に進学した十八歳の男子学生で、実家からバスで大学へ通っていました。野呂 大輔君
「福山学さん(六十三歳)は、現在は妻の薫さん(六十二歳)と二人暮らしをしています。妻の薫さんは、

留学だより

高橋 一平

二〇〇七年十二月十二日から社会医学講座中路教授を始め、多くの方々のご高配ご協力により、ニュージーランドオタゴ大学の School of Physiotherapy のバクスター (David Baxter) 教授 (学部長) のもとで研究させていただいてます。

バクスター教授は Health & Rehabilitation Sciences を専門分野としており、特に「腰痛症」に関しては世界的な腰痛治療研究のプロジェクターの一人です。今回、私はこのプロジェクトの一環である疫学調査・研究に参加しております。

研究室研修の実施と優秀発表賞について

脳神経病理学講座 教授 若林 孝一

この興味は高く、私も何度もこのことにつき説明しました。英語には今でも苦労させられていますが、ニュージーランドの英語はキウイイングリッシュと言われ、オーストラリアと同じく「E (アイ)」という音の発音が強いことが特徴で、*day* を *dei* と発音します。バクスター教授はイギリス出身のためクイーンズ

イングリッシュで聞きやすいのですが、地元出身のスタッフの「訛り」に慣れるにはまだまだ時間がかかりそうです。また、四月にはこちらで主催された学会にスタッフとして参加し、海外の学会運営を内部から経験できました。

オタゴ大学のあるダニデンは、ニュージーランドの南島南部に位置する学園都市であり市内はスコットランド風の重厚な石造り建築で溢れ、歴史的な街並みを形成しています。また、ニュージーランド人は知らぬ人にも親切に接してくる陽気な人たちです。仕事の無い休日は、家族で観光や地元のコミュニティに参加しています。



「腰痛症」は社会医学的に重要な疾患であり、平成十六年度の国民生活調査によると有訴者率の第一位、

「腰痛症」は社会医学的に重要な疾患であり、平成十六年度の国民生活調査によると有訴者率の第一位、



左から佐藤医学部長、辻嶋君、齊藤君、近藤さん、沖津君、若林教授

平成十五年度まで四年度前期に実施していた研究室研修が平成十八年度から三年ぶりに復活し、三年次後期 (火・水・木の午後) に行うことになりました。さらに、元村教授が科目代表であった頃は研修終了後に発表会を行っていたことを見習い、今年度 (平成十九年度) から研究室研修発表会を復活しました。

今年度は三年次学生八名 (修士編入学を除く) が、受け入れ希望のあった三十三講義のいずれかにおいて十月から一月まで研修を行いました。昨年は二つの講座に二ヶ月ずつ配属しましたが、今年度は研修内容を深めるため学生を一つの講座に貼り付けました。

発表会は二月五日から七日の午後に基礎大講堂で行われました。なお、これまでチュートリアル教育において優れたシナリオを作成した学生に優秀シナリオ賞を贈呈してきた経緯もあり、奥村学務委員長に優秀発表賞を設けてはどうかと提案したところ、学務委員会においてご快諾いただき



ベスト研修医賞選考会で研修医の発表に聞き入る参加者たち。

審査の結果、今回は以下の四演題が優秀発表賞に選ばれました (三位は同点のため四題を選出。カッコ内は配属講座)。辻嶋直樹 [Effect of a Listerial Amidase on Host Immune Response] (感染生体防御学講座)、齊藤高「筋萎縮性側索硬化症における「Dlx5」陽性神経細胞内封入体の免疫電顕的検討」(脳神経病理学講座)、近藤順子「児童相談所における虐待への対応」(神経精神医学講座)、沖津篤「SIRT6 発現増加による紫外線皮膚障害抑制の検討」(皮膚科学講座) (なお

審査の結果、今回は以下の四演題が優秀発表賞に選ばれました (三位は同点のため四題を選出。カッコ内は配属講座)。辻嶋直樹 [Effect of a Listerial Amidase on Host Immune Response] (感染生体防御学講座)、齊藤高「筋萎縮性側索硬化症における「Dlx5」陽性神経細胞内封入体の免疫電顕的検討」(脳神経病理学講座)、近藤順子「児童相談所における虐待への対応」(神経精神医学講座)、沖津篤「SIRT6 発現増加による紫外線皮膚障害抑制の検討」(皮膚科学講座) (なお

四名の順番は発表順)。さらに、以下の六名は優秀発表賞に準ずる成績でした。田名部玲子 (生体構造医科学講座)、内田知顕 (統合機能生理学講座)、光根歩 (消化器血液内科学講座)、小田切理 (循環呼吸腎臓内科学講座)、八木澤允貴 (内分泌代謝内科学講座)、当麻理恵 (麻酔科学講座) (順番は発表順)。優秀発表賞に選ばれた四名はどれもすばらしい発表で高得点を獲得しました。辻嶋君は流暢な英語で発表を行ったこと、齊藤君は発表がわかりやすく質問にも的確に答えていたこと、近藤さんは発表でも質問でも自分の言葉で語り説得力があったこと、沖津君は発表自体の内容が優れていたことが受賞理由とされます。なお、授賞式が三月四日に医学部長室で行われ、佐藤医学部長から四名の学生に優秀発表賞が贈呈されました (写真)。

最後に、四ヶ月にわたり学生を受け入れ指導していただいた担当教員ならびに今回審査を担当して下さった教員の方々に心より感謝申し上げますとともに、来年度もご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成 19 年度 ベスト研修医賞選考会

卒後臨床研修センター長 加藤 博之



ベスト研修医に贈呈されたメダル (純銀製)。

平成十九年度ベスト研修医賞選考会が平成二十年二月二十九日十八時より医学部コミュニケーションセンター (MCC) 二階で開催された。ベスト研修医賞は平成十六年度からの卒後臨床研修必修化に合わせて本学に創設された賞であり、今回で四回目を迎える。当日は、平成十九年度に本学附属病院で研修を行った岡田有史先生 (一年次)、斎藤淳一先生 (一年次)、藤田和歌子先生 (一年次)、綿貫裕先生 (一年次)、小田桐元先生 (二年次) (年次別五十音順) の五名の研修医の先生が、「研修生活を振り返って」気づいたこと・伝えたいこと」と題して、七分間ずつスピーチを行った。このテーマの趣旨は、一年間の研修生活を振り返り、大切だと感じたことを後輩に伝えてもらうことにある。聴衆は学生および教職員で、スピーチのあとに参加した五十二名の学生諸君 (五年生が主) による投票が行われ、藤田和歌子先生が平成十九年度ベスト研修医に選ばれた。引き続き MCC

一階で表彰式が行われ、ベスト研修医賞として賞状、純銀製メダル、記念品が、次点となった岡田有史、斎藤淳一両先生 (両者同数票) には優秀研修医賞として賞状、楯、記念品が贈られた。その他にも特別賞として、この一年間コマディカルスタッフから最も高い評価を受けた綿貫裕先生に「グッドパートナー賞」が、研修医が提出すべき各種症例レポートを最も一生懸命書いた藤田和歌子先生に「レポート大賞」が、入院患者さん向けのクリスマス

(次ページへ続く)



列を作ってベスト研修医賞の投票を行なう学生諸君。



花田病院長よりベスト研修医賞メダルを贈呈される藤田和歌子先生。

も研修医と五・六年次学生は立場の違いはあれ、約一年にわたり院内で同じ時間と場を共有し、苦楽を共にしてきた間柄である。研修医は学生に先輩としての様々なアドバイスを行い、(無意識のうち)に範を示し、

① アカデミックな環境 「大病院は症例が少ない、Common diseaseが見れない」と本気で思っている人がいるが、決してそうではない。勉強すべき症例は山ほど転がっているし、大病院に入院中の患者さんだつて、発熱、嘔吐、下痢、頭痛、腹痛、etc.の症状を訴えるわけであるから、鑑別診断も必要だ。大病院ではカンファレンスが定期的に行われる為、一つの症例に対し

② 夢の実現を応援してくれる環境 私は心臓血管外科に進むと固く心に決めていた。学生実習時のように、各科で勧誘の嵐にあうことを恐れていたが、初めから「一外科志望です」と言っただけで、将来、役に立ちそうな症例や手技を重点的に勉強することができた。

③ 人を大切にしている環境 大病院の研修医は大切にされていると日々感じる。廊下で出会えば会釈だけでなく、「いま何科? ががんばってる?」と声をかけてくださる先生達やスタッフの多いこと! 時には研修医なんて辞めたくなくなったり、トイレで泣きたくなることもあるが、私は日々、まわ

いまだに引きずっている科があるという点である。研修医の私達は複数の科をまわるわけであるから、大病院の研修医数が増えれば、将来、科と科の間の壁は低くなるかもしれない。最後に、各科でお世話になつた先生、落ち込む私をいつも励まし見守ってくれた一外科の先生、卒後臨床研修センターのみなさん、そして、ぎっくり腰でヨロヨロ歩いていた私にシッパを下さった藤先生に感謝したい。

ポスターが病院中に貼られており、患者さんやコメディカルの方々の協力も学生教育に非常に協力的です。一例をあげると、病棟の看護師に「line crackleを呈する患者さんはいないか。」と尋ねると、探し出してきてくれます。これは特別なことではなく、とにかく経験したことのない所見を見ることが奨励されているのです。A & Eでの実習は実に刺激的なものでした。自分で新患を選び、患者さんの元に行きます。自己紹介をし、病歴や理学所見を取り、研修医にプレゼンします。次に研修医が同じよう所見を取り、検査や写真をオーダーします。採血やルート確保は学生の仕事なのでさせてもらえます。次に研修医の上級医に対するプレゼンを聞いて、自分にはなに

「本賞の概要」 本賞の制度の概要は以下のようなものである。 一、年度末に研修医によるミニ講演会(スピーチ)を行う。発表時間は一名七分、スピーチのテーマは「研修生活を振り返って一気づいたこと・伝えたいこと」。

「本賞創設の背景とねらい」平成十六年度より卒後臨床研修は必修化され、本院でも参加者体験型実践的オリエンテーション、研修医のためのプライマリ・ケア

セミナー、新制度によるPC、研修医の医療行為に関する基準の制定、EPOCによる双方向性評価の導入、研修医当直室の整備、研修医宿舎の設置、など研修新時代を睨んだ研修医のための施策を次々に打ち出してきた。「ベスト研修医賞」の創設もそのような施策の一環であり、当然研修医のモチベーションを向上させる目的があるが、本賞にはおそらく他施設・他学にはない本学独自のユニークな特徴が一つある。それは賞の選考を学生(特に五・六年生)が投票により行うことであり、このことは教育上大きな意味を持っている。そもそも

① アカデミックな環境 「大病院は症例が少ない、Common diseaseが見れない」と本気で思っている人がいるが、決してそうではない。勉強すべき症例は山ほど転がっているし、大病院に入院中の患者さんだつて、発熱、嘔吐、下痢、頭痛、腹痛、etc.の症状を訴えるわけであるから、鑑別診断も必要だ。大病院ではカンファレンスが定期的に行われる為、一つの症例に対し

② 夢の実現を応援してくれる環境 私は心臓血管外科に進むと固く心に決めていた。学生実習時のように、各科で勧誘の嵐にあうことを恐れていたが、初めから「一外科志望です」と言っただけで、将来、役に立ちそうな症例や手技を重点的に勉強することができた。

③ 人を大切にしている環境 大病院の研修医は大切にされていると日々感じる。廊下で出会えば会釈だけでなく、「いま何科? ががんばってる?」と声をかけてくださる先生達やスタッフの多いこと! 時には研修医なんて辞めたくなくなったり、トイレで泣きたくなることもあるが、私は日々、まわ

いまだに引きずっている科があるという点である。研修医の私達は複数の科をまわるわけであるから、大病院の研修医数が増えれば、将来、科と科の間の壁は低くなるかもしれない。最後に、各科でお世話になつた先生、落ち込む私をいつも励まし見守ってくれた一外科の先生、卒後臨床研修センターのみなさん、そして、ぎっくり腰でヨロヨロ歩いていた私にシッパを下さった藤先生に感謝したい。

ポスターが病院中に貼られており、患者さんやコメディカルの方々の協力も学生教育に非常に協力的です。一例をあげると、病棟の看護師に「line crackleを呈する患者さんはいないか。」と尋ねると、探し出してきてくれます。これは特別なことではなく、とにかく経験したことのない所見を見ることが奨励されているのです。A & Eでの実習は実に刺激的なものでした。自分で新患を選び、患者さんの元に行きます。自己紹介をし、病歴や理学所見を取り、研修医にプレゼンします。次に研修医が同じよう所見を取り、検査や写真をオーダーします。採血やルート確保は学生の仕事なのでさせてもらえます。次に研修医の上級医に対するプレゼンを聞いて、自分にはなに

「本賞の概要」 本賞の制度の概要は以下のようなものである。 一、年度末に研修医によるミニ講演会(スピーチ)を行う。発表時間は一名七分、スピーチのテーマは「研修生活を振り返って一気づいたこと・伝えたいこと」。

「本賞創設の背景とねらい」平成十六年度より卒後臨床研修は必修化され、本院でも参加者体験型実践的オリエンテーション、研修医のためのプライマリ・ケア

セミナー、新制度によるPC、研修医の医療行為に関する基準の制定、EPOCによる双方向性評価の導入、研修医当直室の整備、研修医宿舎の設置、など研修新時代を睨んだ研修医のための施策を次々に打ち出してきた。「ベスト研修医賞」の創設もそのような施策の一環であり、当然研修医のモチベーションを向上させる目的があるが、本賞にはおそらく他施設・他学にはない本学独自のユニークな特徴が一つある。それは賞の選考を学生(特に五・六年生)が投票により行うことであり、このことは教育上大きな意味を持っている。そもそも

① アカデミックな環境 「大病院は症例が少ない、Common diseaseが見れない」と本気で思っている人がいるが、決してそうではない。勉強すべき症例は山ほど転がっているし、大病院に入院中の患者さんだつて、発熱、嘔吐、下痢、頭痛、腹痛、etc.の症状を訴えるわけであるから、鑑別診断も必要だ。大病院ではカンファレンスが定期的に行われる為、一つの症例に対し

② 夢の実現を応援してくれる環境 私は心臓血管外科に進むと固く心に決めていた。学生実習時のように、各科で勧誘の嵐にあうことを恐れていたが、初めから「一外科志望です」と言っただけで、将来、役に立ちそうな症例や手技を重点的に勉強することができた。

③ 人を大切にしている環境 大病院の研修医は大切にされていると日々感じる。廊下で出会えば会釈だけでなく、「いま何科? ががんばってる?」と声をかけてくださる先生達やスタッフの多いこと! 時には研修医なんて辞めたくなくなったり、トイレで泣きたくなることもあるが、私は日々、まわ

いまだに引きずっている科があるという点である。研修医の私達は複数の科をまわるわけであるから、大病院の研修医数が増えれば、将来、科と科の間の壁は低くなるかもしれない。最後に、各科でお世話になつた先生、落ち込む私をいつも励まし見守ってくれた一外科の先生、卒後臨床研修センターのみなさん、そして、ぎっくり腰でヨロヨロ歩いていた私にシッパを下さった藤先生に感謝したい。

ポスターが病院中に貼られており、患者さんやコメディカルの方々の協力も学生教育に非常に協力的です。一例をあげると、病棟の看護師に「line crackleを呈する患者さんはいないか。」と尋ねると、探し出してきてくれます。これは特別なことではなく、とにかく経験したことのない所見を見ることが奨励されているのです。A & Eでの実習は実に刺激的なものでした。自分で新患を選び、患者さんの元に行きます。自己紹介をし、病歴や理学所見を取り、研修医にプレゼンします。次に研修医が同じよう所見を取り、検査や写真をオーダーします。採血やルート確保は学生の仕事なのでさせてもらえます。次に研修医の上級医に対するプレゼンを聞いて、自分にはなに

「前ページより」 行事などに熱心に参加した小田桐元先生に「ナイスサントクロース賞」が、日頃の研修に加え研修医向け各種講習会等に意欲的に参加した斎藤淳一先生に「アグレッシブ賞」が、贈られた。さらに事務方からも、この一年間研修関係の事務手続きに最も迅速かつ正確に協力してくれた岡田有史先生に感謝の意を込めて「クイックレスポンス賞」が贈られた。つづいて懇親会に移ったが、五年生からも「ベスト指導医賞」、「ベスト六年生賞」等の発表があった。会場は非常に盛り上がりがあり、教職員も多数の参加があり、教職員、研修医、学生がみな、本学の卒後研修や臨床実習について、更には将来の夢について互いに率直に語り合い、会は盛會裏に終了した。

二、聴衆は本学学生。とくに臨床実習(BSL)、クリニカル・クラブで研修医たちに間に接してきた五、六年生たちがメインゲスト。教職員の聴講ももちろん可。 スピーチ終了直後に、学生の投票により「ベスト研修医」一名を選出する。投票権があるのは学生のみ。 四、引き続きMCC一階で学生、教職員参加のもと表彰式を行い、病院長よりベスト研修医一名に賞状とメダル、優秀研修医二名に賞状と楯を贈る。つづいて懇親会を行う。



奥村学務委員長、佐藤医学部長、花田病院長と共に、ベスト研修医賞の藤田和歌子先生(前列中央)、優秀研修医賞の斎藤淳一先生(同左)、岡田有史先生(同右)。

学生はそんな研修医の姿を見て、近未来の自分の姿を具体的にイメージし、卒後研修についてより深く考えるようになるであろう。さらに、経験を踏まえて良きアドバイスを与えてくれた先輩に対し、昨年度に引き続き今回も「ベスト六年生賞」が五年生から贈られ、学生間でも「屋根瓦方式」教育が定着しつつあること

が窺われた。臨床医学の現場には教科書に載っていない現場ならではの学習課題がたくさんある。これらに身をつけるためには身近な先輩から習うのが最も効率的である。本賞がこれからの「屋根瓦方式」教育を促進し、本学の医学教育の厚みを増すために貢献すること

りの人達や患者さんに支えられている。 以上、大病院の良い点を述べたが、もちろん、改善すべき点もある。例えば、各科の壁が高いことや、意味のない儀式的な風習を

スコア、成績、志望動機など)と面接で選抜されます。 ペニンシュラ医学学校はエクセター大学とプリマス大学が共有する医学学校で、三つの附属病院を有しています。私はその中でも、イングランド最南端に位置するコーンウォール州の州都 Truro にある Royal Cornwall Hospital Truro に実習しました。

ポスターが病院中に貼られており、患者さんやコメディカルの方々の協力も学生教育に非常に協力的です。一例をあげると、病棟の看護師に「line crackleを呈する患者さんはいないか。」と尋ねると、探し出してきてくれます。これは特別なことではなく、とにかく経験したことのない所見を見ることが奨励されているのです。A & Eでの実習は実に刺激的なものでした。自分で新患を選び、患者さんの元に行きます。自己紹介をし、病歴や理学所見を取り、研修医にプレゼンします。次に研修医が同じよう所見を取り、検査や写真をオーダーします。採血やルート確保は学生の仕事なのでさせてもらえます。次に研修医の上級医に対するプレゼンを聞いて、自分にはなに

ベスト研修医賞を受賞して

藤田 和歌子

英国での臨床実習のための

短期留学体験記

医学部医学科 六年 脇本 剛



学生への協力をよびかけるポスター

（前ページより）
 が足りなかったかを確認し、最後にカルテに記入させてもらいます。この繰り返しでしたが、BSLでの一年間、イギリスでの三週間の実習の総仕上げとして、本当に有意義なものでした。
 ここでは、ほんの一部しか紹介できませんが、詳しいことは医学教育振興財団から出版される平成十九年度版の報告書に記載してあります（学務で閲覧可能）。興味を持たれた方は参考にしてみ、ぜひ本プログラムにチャレンジして

みて下さい。新しい世界が広がります！
 現在、柔道部は広く部員を募集しております。英国に行く、「なにか日本武道はやっていないのか？」と必ず聞かれます。全学での練習には留学生も参加し、英会話の練習にも事欠きません。もちろん留学についてもアドバイスいたしますので、少しでも柔道をやってみたい方は協本までご連絡下さい。
 gohJapan1223@cyber.ocn.ne.jp

社団法人 青森医学振興会

沿革 平成11年3月1日 弘前大学医学部医学科後援会贈付医学振興会発足（任意団体）
 平成13年4月2日 社団法人青森医学振興会設立許可（青森県）

振興会では、21世紀の青森県の医学・医療を積極的に支援しようと次の事業を行っております。
 ○医学教育の助成 教育活動を活性化するための支援
 ○医学研究の助成 研究活動を高度化するための支援
 ○地域医療振興事業の助成 地域医療に貢献するための支援
 ○医学国際交流の助成 国際学術交流の支援

随時、会員の募集とご寄附の受付をしております。
 会費と寄附金の納入方法は下記の通りです。

口座名	社団法人 青森医学振興会		
口座	青森銀行 弘前支店	普通 1087485	※ 各銀行の本支店及びゆちよ銀行から振込む場合は、手数料無料です。
	みちのく銀行 大学病院前支店	普通 0198579	
	ゆちよ銀行振替(旧 郵便振替)	02200-4-57580	
会費	会員種別	年会費	お振り込みいただく場合は、お手数ですが、振興会事務局までご連絡(電話、メール)願います。
	医学部教員	1万円	
	医学部卒業生	2万円	
	賛同する個人賛同する団体	1万円 10万円	

お問い合わせ TEL:0172(33)5111内線6519 E-mail:jm6519@cc.hirosaki-u.ac.jp

弘前大学 後援会のご案内

弘前大学後援会では、学生の学業、課外活動への助成、学生の進路指導に必要な助成等学生生活の多岐にわたる分野の助成を行っております。つきましては、何卒本会の趣旨に御賛同頂きまして、各位の格別の御高配、御

支援を賜りますよう、切にお願い申し上げます。

なお、入会方法等の詳細については、弘前大学総務部総務課広報・支援グループ (Tel:0172-39-3012 E-mail:jm3012@cc.hirosaki-u.ac.jp) までご連絡ください。また、弘前大学後援会ホームページ (http://www.hirosaki-u.ac.jp/kouen/index.html) をご覧くだ

人事異動

○大学院医学研究科
 配置換 (20・3・16)
 放射線科学講座 助教 畑山 佳臣 (放射線科助教)
 定年 (20・3・31)
 神経解剖・細胞組織学講座 教授 正村 和彦
 消化器外科科学講座 教授 佐々木 睦男
 法医学講座 講師 北 武 (特任講師)
 任期満了退職 (20・3・31)
 動物実験施設 准教授 八木澤 誠

皮膚科学講座 助教 武田 仁志
 辞職 (20・3・31)
 内分泌代謝内科学講座 助教 工藤 貴徳 (八戸市立市民病院)
 小児科学講座 助教 小藤 耕 (病院助手)
 工藤 耕 (病院助手)
 神経精神医学講座 助教 菅原 典夫 (弘前愛成会病院)
 胸部心臓血管外科科学講座 助教 青木 哉志
 (船橋市立医療センター)
 胸部心臓血管外科科学講座 助教 山田 芳嗣 (青森労災病院)
 整形外科科学講座 助教 福田 陽 (黒石病院)
 眼科学講座 助教 石川 太 (札幌医科大学)

弘前大学医学部 臨床教授・臨床准教授 称号付与者

横山 徹 (大館市立総合病院整形外科部長)
 平成二十年四月一日 / 平成二十三年三月三十一日
 斎藤 聡 (青森県立中央病院消化器内科・腫瘍内科部長)
 平成二十年四月一日 / 平成二十三年三月三十一日
 斎藤 文男 (青森県立中央病院メンタルヘルス科部長)
 平成二十年四月一日 / 平成二十三年三月三十一日
 藤野 安弘 (青森県立中央病院副院長)
 平成二十年四月一日 / 平成二十三年三月三十一日
 馬場 正之 (青森県立中央病院神経内科部長)
 平成二十年四月一日 / 平成二十三年三月三十一日
 櫻庭 知己 (青森県立中央病院眼科部長)
 平成二十年四月一日 / 平成二十三年三月三十一日
 村川 徳昭 (大館市立総合病院麻酔科部長)
 平成二十年四月一日 / 平成二十三年三月三十一日

臨床准教授
 小笠原 仁 (大館市立総合病院第二内科部長)
 平成二十年四月一日 / 平成二十三年三月三十一日
 小松 尚 (青森県立中央病院整形外科副部長)
 平成二十年四月一日 / 平成二十三年三月三十一日
 真鍋 麻美 (独立行政法人国立病院機構弘前病院産婦人科医長)
 平成二十年四月一日 / 平成二十三年三月三十一日
 森川 晶子 (青森県立中央病院産科婦人科部長)
 平成二十年四月一日 / 平成二十三年三月三十一日

脳神経外科科学講座 助教 小笠原ゆかり (医員)
 救急・災害医学講座 助教 塚田 晴彦 (医員)
 臨床薬理学講座 助教 杉本 勝良 (昭和薬科大学)
 採用
 法医学講座 特任講師 北 武 (法医学講座講師)
 内分泌代謝内科学講座 助教 照井 健 (青森県立中央病院)
 小児科学講座 助教 鈴木 康一 (病院助手)
 神経精神医学講座 助教 楠木 将人
 (独立行政法人国立病院機構弘前病院)
 神経精神医学講座 助教 藤井 学 (弘前愛成会病院)
 胸部心臓血管外科科学講座 助教 境 雄大 (青森労災病院)
 胸部心臓血管外科科学講座 助教 渡辺 健一 (弘前市立病院)
 整形外科科学講座 助教 柳澤 道朗
 (独立行政法人国立病院機構弘前病院)
 皮膚科学講座 助教 神 可代 (医員)
 眼科学講座 助教 竹内 侯雄 (医員)
 耳鼻咽喉科学講座 助教 井上 卓 (医員)
 救急・災害医学講座 助教 安達 淳治 (公立野辺地病院)
 救急・災害医学講座 助教 矢口 慎也 (北里大学病院)
 昇任 (20・4・1)
 法医学講座 准教授 美作宗太郎 (法医学講座講師)
 泌尿器科学講座 准教授 神村 典孝
 (泌尿器科学講座講師)

勤務配置変更 (20・4・1)
 消化器外科科学講座 助教 石戸圭之輔
 (統合機能生理学講座助教)
 臨床薬理学講座 助教 三浦 淳
 (神経精神医学講座助教)
 採用 (20・5・1)
 統合機能生理学講座 助教 二ノ倉欣久
 (マサチューセッツ工科大学)

○医学部附属病院
 採用 (20・3・1)
 脳神経外科 助教 工藤香名江 (医員)
 配置換 (20・3・16)
 放射線科 助教 大畑 崇
 (放射線科学講座助教)
 任期満了退職 (20・3・31)
 循環器内科呼吸器内科腎臓内科 助教 横山 仁 (新東京病院)
 辞職 (20・3・31)
 整形外科 講師 横山 徹 (大館市立総合病院)
 周産母子センター 講師 佐藤 工
 (独立行政法人国立病院機構弘前病院)
 循環器内科呼吸器内科腎臓内科 助教 藤本 幸士
 (五所川原市立西北中央病院)
 呼吸器外科・心臓血管外科 助教 須藤 武道 (弘前市立病院)
 皮膚科 助教 池永 五月
 泌尿器科 助教 岡本亜希子 (医員)
 耳鼻咽喉科 助教 丸屋信一郎
 (国際医療福祉大学附属三田病院)
 脳神経外科 助教 竹田 哲司 (医員)
 検査部 助教 島田美智子 (フロリダ大学)

採用 (20・4・1)
 循環器内科呼吸器内科腎臓内科 助教 阿部 直樹
 (国立療養所松丘保養園)
 循環器内科呼吸器内科腎臓内科 助教 林 彰仁 (大館市立総合病院)
 呼吸器外科・心臓血管外科 助教 北川理映子 (医員)
 皮膚科 助教 皆川 智子 (医員)
 泌尿器科 助教 岩淵 郁哉
 (国立療養所松丘保養園)
 耳鼻咽喉科 助教 阿部 尚央 (八戸市立市民病院)
 検査部 助教 熊坂隆一郎
 (鯉ヶ沢町立中央病院)
 周産母子センター 助教 大谷 勝記
 (独立行政法人国立病院機構弘前病院)
 昇任 (20・4・1)
 整形外科 講師 小野 陸 (整形外科 助教)
 配置換 (20・4・1)
 整形外科 助教 菊池 明
 (救急・災害医学講座 助教)
 併任 (20・4・1)
 消化器科部長・乳腺外科部長・甲狀腺外科部長 袴田 健一
 手術部長 福田 幾夫
 輸血部長 伊藤 悦朗
 併任 (解除) (20・4・1)
 福田 幾夫
 (輸血部長の併任解除)

編集後記

今年は、桜の開花が早く、暖かい中で花見が出来て良かったと思っていたら、花見が終わったとたん寒さがぶり返し風邪を引きました。先日のNHKスペシャルでは、北極海の氷が年々減少している結果、北極熊が絶滅の危機にあることが放映され、地球温暖化のつびきならないところまで来たことが強調されてきました。最近身近な異常気象に危惧の念を抱かせられます。さて、地球規模の環境もさることながら、青森県の医療環境ものつびきならないところまで来た様に思います。全国的には、小児科医、産婦人科医、救急科医および私が担当しております麻酔科医不足が指摘され、特定診療科などと絶滅危惧種に分類されたような感があります。青森県ではこれら特定診療科に限らずほとんどの診療科の医師不足が深刻です。その結果、どの教室も運営が年々厳しくなっており、そろそろ限界が見えてきたように思います。県もその点は、充分に分かっているようですが、大学病院と共同してという関係にはなれないようで、県は県、大学は大学という構図がより鮮明となっており、我々としてはとても歯痒い思いです。来年度からAO入試が始まりますが、この制度が定着して青森県の医師不足が解消に向かえばと期待しています。私の所属する麻酔科における全国の最近の後期研修医の動向を見ると、首都圏から地方中堅都市の大学病院への回帰が進んでおり、北陸、北海道にも初期研修制度導入前と同人数教室員が入るようになり、一息つけるようになったと聞いています。何でも東北は最後に流行が来るところです。あともう一頑張りかなと思う今日この頃です。(廣田 記)